

落語に見られる「というと・てえと」の談話機能論的分析

An Analysis of Discourse Function regarding the Usage of ‘to-iuto’ in Rakugo Performances

森 真由美

Mayumi MORI

1. はじめに：本研究の背景と視点

日本語・日本文化教育の教室活動において、落語を「テーマ」にして取り入れることはさほど珍しいことではない。現在、筆者が担当している日本語クラスで使用しているテキスト¹にも落語に関するトピックが出てくる。そういった課を終了した後に、実際に落語を聞くという活動に発展することは多にありうる。その場合、落語の音声には、学習者が通常では聞き慣れないような音声表現が現れるが、その中でも特に江戸落語に類出すると観察されるものに「というと・てえと（「という」との音変化したもの）」が挙げられる。

例) 高価な品物を扱うというような道具屋
さんになるってえと、まず、目が利か
ないってえと、これはできません。
(古今亭志ん朝「茶金」)

では、日本語授業に江戸落語を取り入れる場合、教師はこの「というと・てえと」（以下、

「というと」と記述する)をどのように説明するのか。日本語教育の現場で一般的に使用される日本語文型辞典などで「というと」の用法を調べると、連想、確認、説明といった説明が書かれている²が、これらは「N／普通形³というと」「～はというと」「～かというと」などの定型表現に限られており、これだけでは、現実の音声に現れる落語の「というと」の説明には不十分である。教室活動で落語を聞かせるのなら、たとえ、この「というと」に関して学習者からの質問がでないとしても、教師側はきちんと把握しておくべきであると考えられる。メイナード (1994) は「という」表現について「日本語の談話では、書き言葉、話し言葉ともに「という」に関する表現が頻繁に使われ」ているとし、さらに次のように述べている。

¹ 東京外国語大学留学生日本語教育センター編 (2014) 『留学生のためのアカデミック・ジャパニーズ聴解 中上級』(スリーイーネットワーク) では、全15課の構成のうち、第5課「そば屋ののれん」で変体仮名を、第10課「落語」でその歴史などの基礎知識を、第11課「そばをすする音」で日本のマナーをテーマに取り上げている。

² 参考 友松悦子他 (2010) 『日本語表現文型辞典』アルクグループジャマシィ編 (2007) 『日本語文型辞典』くろしお出版

³ この普通形とは、友松悦子他 (2010) 『日本語表現文型辞典』アルク (p10) よれば、丁寧形に対するものである。例えば、動詞の普通形「行く」に対してその丁寧形は「行きます」、形容詞の普通形「寒い」に対してその丁寧形は「寒いです」となる。また、N (= noun) は名詞を表し、「N／普通形」とは、名詞または用言の普通形であることを表す。

これは日本語の発想法や表現法とも結びついているのではないだろうか。この意味からも広く「という」表現を観察することは意義のあることと思われるが、実際広範囲にわたる「という」表現の実態はまだまだ十分に解明されたとはいえず、疑問点が多く残っている。メイナード (1994: 81)

「という」表現の類は言語の他のあらゆる表現と違って、言語表現それ自体をさし示すことができるメタ言語的表現である。言語表現を使ってそれ自体についてコメントするという行為を解明することは語用論でも当然論じられていいはずである。メイナード (1994: 84)

本研究ではそのような考えに基づき、このテーマを取り上げることにする。

さて、落語の音声資料 (CD, DVD) に頻出する「というと」について、21の落語噺 (三代目柳家小さん～林家たい平)⁴を文字化したところ、232の出現箇所⁵が見られたが、そのうちの「してってえと」⁶は「(そう) していると」の縮約形と考え、今回の分析対象から外したので231箇所となった。抽出した231箇所のうち、「明日一番でもって、成田へたたくちゃあいけない。一番てえと (=一番というと) 五時でございます (古今亭志ん朝 寢床)」の中の下線部のように「というと」という表現でなければ文が成立しないもの、つまり定型表現が44箇所、一方、「これでまた声かけないってえと (=声かけないというと)、むこうがひがむとと思ってさ。(三遊亭歌る多 饅

頭こわい)」の中の下線部のように「という」を省いて接続助詞「と」という表現だけでも文が成立するものが187箇所という結果を得た。(なお、本稿中、この省略可能な「という」については(という)のように括弧()をつけて表記する。)その出現数比は、というと：(という)と=19%：81%(小数点第1位以下四捨五入)となり、これを見ると談話構造上は省略可能な「(という)と」がいかに多く使用されているかが分かる。

本稿では、接続助詞「と」だけで文が成立するにもかかわらず、あえて後者の「(という)と」という形の使用で話が進められるのはなぜか、そこにはどのような談話機能が存在するのかという視点で「(という)と」について考察する。

なお、本稿で用いる「地の文」、「会話文」、「セリフ」について定義しておく。『日本国語大辞典』⁷によれば、それぞれ、「地㊦②文章や語り物で会話や歌を除いた叙述の部分」、「会話①二人以上の人が集まって互いに話をかわすこと」、「セリフ①役者が劇中でいうことば③(一般的に)ことば、会話」と説明されている。これを見ると、「会話」と「セリフ」の定義に厳密な境界はないようである。そこで、本稿では、それらの説明を鑑みながら、落語の構造に注目し、「地の文」を聴衆に対する噺家自身の発話であり噺の内容を説明する時などに現れるもの、「会話文」を噺家が登場人物の発話として表現したものと定義する。そして、その「地の文」の中にも噺家自身やそれ以外の人の発話が直接に引用されたり、また「会話文」の中にも、例えば登場人物1の発話の中にそれ自身やそれ以外の登場人物の発話が引用されたりするので、このような発話を「セリフ」として定義する。具体

⁴ 本稿末に添付した参考資料 [表1] 参照。

⁵ 本稿末に添付した参考資料 [表2] 参照、紙面の都合上、本稿では [表2] の一部を添付した。

⁶ 「こわれたんじゃねえかと思うようなラッパ吹いて。してってえと、ああ、豆腐屋さんだ」(柳家小三治 時そば)

⁷ 日本国語大辞典第二版編集委員会編 (2003) 『日本国語大辞典』小学館

的に以下に提示した例において、「地の文」および「会話文」中の「 」で示されるものを「セリフ」とする。

「地の文」中のセリフの例

(噺家の発話)

やっこさん、きっかけがついたーなんてもんじゃあない。傘をもったまま「わーっ」てえと、さわ竹にひっかかりながら、ふわーっ。(古今亭志ん朝「愛宕山」)

「会話文」中のセリフの例

(登場人物 1 である宿屋の泊り客の発話)

「これ何だい」ってえと、「利息でございます」ってえからね。「そんなもの貸した覚えはないよ」「いえ、へ、ほんの気持ちでございます」「いらないんだ、うちはそんなもの」「んな事言わないで、取っといってください、取っといってください」押し問答、あげくに向こうで「取っといくださーい」ってんで、ポーンと放り出してっちゃう。(古今亭志ん朝「宿屋の富」)

2. 落語の音声資料における「というと／(という)と」の出現状況

1節で述べたように、落語の音声資料(CD, DVD)に類出する「というと／(という)と」

について、21の落語噺から取り出した分析の対象は231箇所である。231箇所のうち、「という」という表現でなければ文が成立しないものが44箇所、一方、「という」を省いて接続助詞「と」という表現だけでも文が成立するものが187箇所という結果であった。その結果を踏まえて、2.1において44箇所の「という」との文型構造とその用法について、2.2において187箇所の「(という)と」の文型構造とその意味について分類する。

ここで、「という」と「(という)と」を別々に分類する必要があると考えた理由は、「という」とは文型辞典などで項目として扱われている事実からその用法が確立していると考えたが、一方、「(という)と」はそのように扱われていないので、筆者は接続助詞「と」の用法を参考に文脈上の意味から分類することにしたためである。

2.1 44箇所の「というと」の分類

以下の表1は、今回の分析の対象とした落語音声資料に見られる「というと」の出現状況について、その文型構造とそれらを用法別に分類したものである。

表1 落語音声資料に見られる「というと」の文型構造と用法分類

		構造	用法分類		
と い う と	〈1〉 N／普通形	というと	6	a 確認	1
				b 内容説明	1
				c 連想	4
と い う と	〈2〉 かというと	というと	15	a 内容説明 疑問句+「というと」(疑問終助詞「か」の脱落を含む)	12
				b 前置きの慣用表現「どちらかというと」	2
				c 前置きの慣用表現「なにかというと」	1
計 44	〈3〉 というと	というと	12	発話の引用(「……」なんていうと)を含む	12
			11	a 主題	7
と い う と	〈4〉 ～はというと	というと		b 対比	4

表1に示されている「というと」という表現でなければ文が成立しないもの(44箇所)とは、「Nというと」「～はというと」などの定型表現であり、これらは『日本語文型辞典』において項目として扱われているものである。以下で、それぞれの用法説明と落語音声資料に現れた例文を提示する。

なお、以下の〈 〉の中の数字、小英字は、上記の表1中のものに準ずる。また、例文前の番号は、本稿末の「江戸落語の音声資料に見られる「というと・てえと」の出現状況」の各番号に準ずる。

〈1〉N／普通形 というと

- a. 確認：ある話題を受けて、それについて確認する。

例文) 61：深さはどのぐらいあんの、ここんところ。80シロ、80シロってえと、これが80かい、ええ、深いねえ。

- b. 内容説明：ある話題を受けて、それについて説明を加える。

例文) 37：明日一番でもって、成田へたなくちゃあいけない。
一番てえと、五時でございます。

- c. 連想：ある話題を受けて、そこから連想されることについて述べる。

例文) 192：よく揺れましたねえ。金魚屋のリヤカーってものは。ですから、揺れるってえとね、中の金魚鉢ばかりじゃありませんよ。

208：打つというと博打。

209：浅草の観音様っていうと、雷門があって、それ抜けて…。

〈2〉かというと

- a. 内容説明(疑問句+「というと」)：疑問詞を含む疑問文を受けて疑問点を示すのに用いる。後ろにはその答えを述べる表現が続く。

例文) 173：何がいちばんまいったかってえと、暑くて、一番影響するのは食欲ですね。

217：鉄下駄のテッチャンて人がいまして、これがどうして鉄下駄って呼ばれてるかというと、あのう、柔道一直線のファンで。

- b. 前置きの慣用表現「どちらかというと」：人や物の性格や特徴を評価する場合に、全体としてはそのような特性・傾向があると述べるときの前置き表現。

例文) 53：あたしね、大将の前ですがね、どっちかってえと、山より川の方が好きなん。

58：あたしはどちらかというとね、こっちから行きたい、こっちから。

- c. 前置きの慣用表現「なにかという」と：「なにかきっかけがあるたびに」という意味で、後ろには人間の行為を表す表現が続き、いつもその行為が繰り返される様子を表すときの前置き表現

(落語音声資料には「なんぞという」という表現であったが、これは「なにかという」との類似表現としてここに分類した。)

例文) 223：よせ、おめえは。何ぞってえと、シャレだとか、うぶだとか、かわいとか、うまくいったためしがねえんだ。

〈3〉というと

発話の引用：「セリフ」「会話文」の終結を表す

例文) 4：「少し高いねえ。」なんてえと、「ああ、高えと思つたら、うちの魚、食ってもらいたくねえや。」なあんて。(「セリフ」の終結)

115：「これなんだい。」ってえと「利息でございます。」ってえからね。

(「セリフ」の終結)

225:「……15, 16文」(「会話文」の終結)
(以下, 地の文) てえと, おいと行ってしま^う。

〈4〉～はというと: 助詞「は」と同じ機能を持つ

a. 主題: 文の中心となる問題

例文) 14: 一番先の兆候はってえと, 頭から汗が出ます。

144: で, 本当に色気があるのはというと, 昔からいう恋煩いというやつですな。

b. 対比: あることを対比的な話題としてとりあげる。「～はというと」の前後には

対立的な内容が述べられる。

例文) 5: フグと申しますと, ただいまは結構なもんでありますが, 昔はってえと, あのフグにはずいぶん, この自分でいろんなことをしたために,
141: 野郎のほうはってえと, 風邪ひき男といまして, 風邪をひいているのがたいへんに, うー, 色気がある。

2.2 187箇所「(という) と」の分類

以下の表2は, 今回の分析の対象とした落語音声資料に見られる「(という) と」の出現状況について, その文型構造とそれらを文

表2 落語音声資料に見られる「(という) と」の文型構造と意味分類

構造		意味分類	
計 187	〈1〉Vる (という) と	156	(a) 時間的前後関係 63
			(b) 順接条件 恒常 48
			(c) 順接条件 仮定 33
			(d) 前置き (比較の慣用表現「そこへいくと」を含む形(7か所)を含む) 12
	〈2〉Vます (という) と	7	(a) 時間的前後関係 2
		(b) 順接条件 恒常 2	
		(d) 前置き 3	
〈3〉Vない (という) と	19	(c) 順接条件 仮定 19	
〈4〉形容詞 (という) と	3	(b) 順接条件 恒常 3	
〈5〉する (という) と	2	(e) 接続詞「すると」を含む形 2	

脈上の意味⁸に分類したものである。

表2において, 接続助詞「と」のかわりに「(という) と」が使われているもの(187箇所)を, 文型構造別に分類し(表2左段), さら

にそれらを文脈上の意味に分類した(表2右段)。「(という) と」表1と「(という) と」表2の分類方法を別々にした理由は, 「(という) と」は文型辞典などですでに項目として確立しているが, 一方「(という) と」はそうではないので, 別々に分類する必要があると判断したからである。表2右段の(a)～(e)の項目は, 先行研究(有田1993, 坪本1993)などを参考に, その文脈や文構造などから筆者が5つに分類

⁸ 本稿表2において, 「文脈上の意味」という表現にしたわけは, 接続助詞「と」の用法について, 坪本(1993)が指摘しているように「条件の意味と時の意味を「ト」自体の固有の意味とするのではなく, 連結される文の意味関係からそれぞれの意味に解される」と考えたからである。

したものである。以下では、意味分類 (a) ~ (e) についての基準を提示し、落語音声資料にみられる例文を添える。

なお、以下の数字、小英字は、上記の表2中のものに準ずる。また、例文前の番号は、本稿末の「江戸落語の音声資料に見られる「というと・てえと」の出現状況」の各番号に準ずる。

(a) 時間的前後関係

分類基準：

以下では、「前件」と「後件」という用語を用いるが、簡単に定義を述べておく。落語に現れた複文の形は「～というと、～」になる。「というと」の直前の部分を「前件」とし、直後の部分を「後件」とする。

- ①前件、後件の出来事を生じたままに描写しているもので、そこに話し手の判断や思考は介入しない。
- ②前件の後件への働きかけはない。
- ③前件、後件が同一主体の動作を表す「動作の順序」も含む。
- ④前件、後件が同一主体による「視線の移動⁹」も含む。

以上の4つの基準で分類したが、文構造は

基本的には「前件：Vる（という）と、後件：Vた」となり、後件はタ形で終わっている。（但し、物語文においては、「語り」の性質上、「Vる（という）と、Vる」となることもある。）

例文) 52：あくる朝になるってえと、大勢で早く起きまして、ぞろぞろぞろぞろやってくる。（時間的前後関係）

149：腰をかけるってえと、苦い茶ようかんが出る。（時間的前後関係）

77：じーっと見ているうちに何を思ったか、茶をあけてしまって、懐から紙を取り出すってえと、これをきれいに拭いまして。（動作の順序）

86：正面を見るってえと、細かいのや大きい戸棚がずらーっと並んでおりまして。（視線の移動）

(b) 順接条件 恒常

分類基準：

- ①前件の行為によって、後件の行為が常に起こるとされるもの。
- ②前件の後件への働きかけがある。

以上の基準で分類したが、文構造は「Vる（という）と、Vる」「形容詞（という）と、Vる」である。

例文) 11：おまえさんはどうも酒飲むてえとね、だらしがないからね、仕事ほったらかしちまうから。

143：熱がありますってえとね、目が潤んできますから。

200：中身が少々まずくったって、井がいってえと、うまく食えるからな。

(c) 順接条件 仮定

分類基準：

- ①前件の行為を仮定したときに、後件の行為が帰結するもの。

⁹「視線の移動」に関して、坪本（1993）は「物語等の文体において表現者が特定の人物の側から事態を記述することをいう。通常の文体では、表現者は自身の視点から事態を眺めるわけであるが、物語等ではある人物に視点を移動し、その人物の立場から事態を捉えることが可能になる。この場合、表現者は当該の人物の主観性に関わる事柄を、あたかも自分自身の主観性に関わる事柄のように扱うことができるわけである。」と説明している。豊田（1983）の「と」の分類にあらわれる「発見」の用法（例文：太郎が家へ帰ると、花子がいた。）も、この「視線の移動」に含まれると解釈する。（豊田の「と」の分類に関しては、有田（1993）「日本語条件文研究の変遷」『日本語の条件表現』くろしお出版p242を参考にした。）

②前件の後件への働きかけがある。

以上の基準で分類したが、文構造は「Vる／Vない（という）と、Vる／Vない」である。

例文) 32: あの隠居、忘れるってえと、
大変な騒ぎだよ。

40: たまには旦那の義太夫を聞かないってえと、虫がおさまらない。

150: 話は順をおっていないってえと、
わかんなくなっちゃうんで。

(d) 前置き

分類基準:

①次の発言の準備としての前置き。

②前件の後件への働きかけはない。

以上の基準で分類した。坪本(1993)では、これを「発話行為のモダリティ」の用法とし、前件と後件の関係について「論理的関係づけというよりも話し手の発話の観点や態度を述べたもの」と説明している。また、『日本文語文型辞典』(2007)では「[言う][見る][考える][比べる]などの発言や思考、比較などを表す動詞に続き、後に続く事柄がどのような観点や立場から述べられているかについて前置きの「述べる表現」と説明されている。これらの説明などを考えると、本稿で対象とした落語音声資料にみられるものの中で④に分類されるものは以下の例文のように「考えてみると」「お話にうかがいますと」「言いますと」などがあり、比較の慣用表現「そこへいくと」もここに分類できる。

例文) 43: 考えてみるってえと、これだねえ、あの義太夫がなきゃいいんですよ。

202: 次から次から誉めるところをみるってえと、あのやろ、そのうち、ほら、食い逃げするんじゃねえかと思った

ら、

31: お話にうかがいますってえと、お料理がでて、お酒がでるそうですね。

221: あなた、上から下までご利益だらけだね、いいなりだよ。そこへいくってえと、おれたちゃ、ご利益うすいや。

(e) 接続詞「すると」を含む形

分類基準:

ここでの基準は、「ドアの前に立った。すると、ひとりでに開いた。」に見られるような接続詞「すると」を含む文の形である。上記表2中〈5〉「する(という)と」は、「Vる+接続助詞:と」ではなく、接続詞「すると」を含む形と考える。

例文) 158: おい、するってえと、なにかー、おめえさんところのお店の若旦那がその短冊もってる?

153: そこでもってやってごらん、その歌を、ね。そうするってえと、「あ、その歌だったら、あそこのお嬢さんが……」てんで。

3. 「という」との分析

「という」とは格助詞「と」+発話動詞「いう」+接続助詞「と」で構成されている。ここでは、それぞれに先行研究を概観する。

3.1 「という」の「と」について

ここで対象とする「という」の「と」は、後続に発話動詞「いう」がともなって、他から聞いた話を伝える、引用を示す格助詞「と」である。

格助詞「と」が持つ引用の機能について語用論や談話分析の観点から考察したものにメイナード(1999)の研究がある。その中では、特に語用論や談話分析の観点から引用ストラテジーを分析した国内外の先行研究が取り上

げられているので、以下にそれらを要約する。
 (『談話分析の可能性』 pp143-150)

Macaulay (1987) によれば、引用戦略は、禁句でも誰かが言ったと引用することによって表現可能となったり、方言やその他の話し方のスタイルを模倣することで、ある人物の性格を表現できたり、話し手としての自分があるシーンで役者のように振る舞うかのように距離感をもって表現できる機能を持つ。

Besnier (1993) によれば、引用戦略は、引用内容を正確に再現する場合や、その伝え方次第で引用者が評価を付け加える場合もあり、その時には引用者は声の調子や副詞の選択、レトリック法などを操作して引用者自身の感情を表現できる。その場合、引用は、情報伝達に加えて引用者が元話者の人格や性格についてどのように判断するかを伝えたり、引用する話の信用度をどう判断するかを伝えたりできる機能を持つ。

Tannen (1989) によれば、もとの発話を正確に再生することは実際には不可能であり、直接引用も含めてすべての引用部分は引用者が創作したものである。つまり、引用内容は誰かが言ったことをレポートするのではなく、あくまで引用者の創作であり、それは引用者の「声」、視点、発想法を表現するひとつの表現手段である。

鎌田 (1988) は、「そうなんだよ。ほら、わかめのぬたっちゅうんだろう？これが食いたくて。「作れ」っても、「この酢味噌の具合がわかんねえ」って、言うんだよ、うちの奴が。」という例文をあげて、現実にはここで登場する妻が「わかんねえ」という男言葉的な表現を使ったとは考えにくく、伝達者である夫がスタイルを調整していると考えられ、このことから、直接話法の基本的機能は、元話者の発話をそのまま繰り返すことではな

く、ある伝達者の場に、元話者の場と考えられる場を持ち込むことによって、場の二重性を作りだし、そこに劇的効果を提供することであるとする。

砂川 (1988) は、鎌田 (1988) と同様に、引用文は「二重の場」によって構成されており、引用句が発言される場を引用文全体が発言される場において再現する機能を持つと述べている。そして、「と」による引用の機能について、名詞句を導く「こと」との差を取り上げ説明している。砂川によれば、「医者には彼に手術する必要があると告げた。／医者は彼に手術する必要があることを告げた。」という2文において、後文の「こと」を使用した表現では、話し手がその場面の状況から抽象化・概念化して捉えた事柄を表している、「こと」はそれが含まれる文全体の話し手が体験した出来事を自らの中で対象化し、概念化して再構成した内容を表すものである。従って「と」引用では場の二重性が認められるのに対し、「こと」表現では場の二重性は見られないとする。

メイナード (1999) においても、引用の「と」と名詞句を導く「こと」の差について、以下の2文を例にあげて説明している。

- A 加恵が憧れているように於継もまた加恵に惚れ込んでいて、だから加恵のすることならどんな些細なことでも気に入るのであろうと思うと、加恵は一層精を出して機を織らずにはいられなかった。(有吉佐和子『華岡青洲の妻』1970)
- B 加恵は朱が古びて冴えた色をしている漆盃の中に盛るように湛えられている濃い酒を見つめて、ここから新しい生き方が始まることを思った。(有吉佐和子『華岡青洲の妻』1970) (下線)

は筆者)

メイナードはA, Bはどちらも思考の引用部分を導く動詞「思う」を用いているが, Aで選ばれた「と」には引用部分に主観的表現が現れていて, 加恵があたかもその場で今考えているような表現となっており, 一方のBでは「こと」を使うことで思考の対象を概念化していると分析している。

以上がメイナード(1999)の概要であるが, 上記の説明を筆者なりに補うとすれば, ここでいう「概念化」した言語表現とは思考回路を経て出てきた言語表現のことであり, 一方の「概念化する前」の言語表現とは, 例えば「あっ, 痛い!」のように思わず口走ってしまうことばのことである。

確かに, 砂川, メイナードが指摘するように, 「自分の不注意で友達を死なせたと後悔している。/自分の不注意で友達を死なせたことを後悔している。」という2文では, 後文の「こと」を使用した表現では事実を概念化して捉えているが, 前文の「と」の場合には発話時点でそういった事実があったかどうかは定まっていないと考えられる。

以上の諸考察から, メイナード(1999)は, 「と」の引用は複数の視点を同時に表現する機能を果たすと述べ, さらに「日本語では「こと」引用より「と」引用が好まれる傾向にあることが認められる。「と」引用では複数の視点が含まれるのだが, 日本語はこのように形式的にはひとつの文でも, 複数の視点が表現しやすい仕組みとなっていると考えられる。」と指摘している。ここでいう「複数の」とは, 引用の「と」が持つ機能は, 単に情報伝達内容だけでなく, 引用者による元話者に対する評価(引用者が捉えている元話者の人格や性格など), 伝達内容に対する引用者の信用度, 引用の場の二重性などであると考え

ることができる。

3.2 「という」について

「という」が持つ機能は大きく3つに分けられる。①発話に「という」を後続させた, いわゆる話法に関するもの, ②「～と誰かが言ったのを聞いた」と記述する伝聞表現, ③「～というN」の形の名詞修飾表現である。本稿では, ①については3.1においてすでに触れたのでここでは言及しない。ここでは, 次の3.2.1で②に関して井上(1983), 3.2.2で③に関してメイナード(1999)の先行研究を概観する。

3.2.1 先行研究: 井上(1983): 日本語の伝達表現とその談話機能

井上(1983)は, 日本語の新聞や論説文に頻用される「という」でしめくくられる伝聞表現について考察している。そこでは以下のような例文があげられている。

ノンフィクションでは『あげはのとぶ日』と『カラスのくらし』が面白かった。アゲハの生態だけでなく天敵にも触れ, 葉の裏に二百個も生まれた卵も, 羽化してさなぎになるのは, たった二匹だけだという。(書評, 『朝日』56年4月23日)

たとえば停滞と伝えられる経済生産性だが, 最近の調査によると七十を超す経済セクターのうち, 日本がアメリカを凌駕するのは数セクターにすぎず, 四十一のセクターではアメリカの方が優位にあるという。(国弘正雄「アメリカを理解するために(下)」『言語』10巻, 7号)(下線は筆者)

井上(1983)は, 上記例文のような「報告文体は, 報告者の立場に立って用いられる文

体なので、「という」のような伝聞のモーダル¹⁰を使わずに、引用部をそのまま直接形で表してよいはずであるが、にもかかわらず「という」表現が頻用されるのは、情報源である人物に視点を置き、直接形を用いてその人物の直接体験を語らせ、生彩のある「語り」を構成しておいて、なおかつ日本語の談話文法の原則を守って伝聞のモーダルをつけ加えている。英語の中間話法¹¹には、「という」に当たるようなものは用いられない。」と述べている。

3. 2. 2 先行研究：メイナード (1999) : 「という+名詞」表現の機能 (pp167-173)

メイナード (1999) は、名詞修飾節と名詞句を連結する「という」表現は、引用のメタ機能と深い関係があるとし、大島 (1991)¹²の「という」介在の2つの条件「1. 修飾節が言語による「表現」行為を経ていることが含意される場合、「という」が必要になる。2. 「という」が任意である構造において、修飾節の表現形式—すなわち当該の「事態」を修飾節の形で「表現してみるとどうなるか」—を話し手が意識している場合、「という」が介在する。」を参考にしながら、名詞句を導く「という」について、その介在の有無によるレトリック効果の違いを考察している。メイナードは、「「という」はその過程で、「という」が導く節を焦点化・前景化する機能を果たしていると言える。ここで焦点化とは、物語の中

で重要な要素に読者の注意を引くために用いるレトリック手段を指す。また、前景化とは物語のあら筋の進展に重要な情報を主節で、または主節のような効果をともなう言語形式で、表現する操作を指す。焦点化も前景化もレトリック効果の一種である。」とする。さらに、「忘れっぽいという欠点」と「忘れっぽい性格」という2つの表現効果の違いを観察し、「忘れっぽいという」が使われる時は「忘れっぽい」が焦点化され、そこに物語の語り手の存在がより鮮明に感じられる一方で、「忘れっぽい」性格と言う時は、既成の事実として従属節内で述べているのであって、語り手個人のモダリティ表現の意図があまり感じられない。このような効果は、基本的には引用の「という」のメタ言語機能に基づいている」と述べ、「「という」が任意の場合¹³、「XというY」はXがその談話で比較的大切であり、それを焦点化・前景化するために使われる」と結論づけている。

3. 3 接続助詞「と」について

3. 3. 1 先行研究

3. 3. 1. 1 坪本 (1993) : 条件と時の連続性

坪本 (1993) は、〈ト〉連結による「時」と「条件」の用法を人間の認知領域の違いとし、時系列で連結されることがらの関係を捉える領域における人間の認知・理解の仕方と、話し手の認識をより反映した領域と捉えている。以下に、坪本 (1993) の考察を要約する。

- a. 飛行機は、滑走路に出るト、勢いよく走っていった。
- b. 窓を開けたまま寝るト、風邪をひく(よ)。
- c. 本当を言うト、一時半には東京に帰っ

¹⁰ ここで井上 (1983) のいう「モーダル」とは、話者の断定・推量などの判断を表すもの、たとえば「そうだ」「はずだ」「ようだ」「らしい」「のだ」など。

¹¹ 中間話法と伝達文について、鎌田修 (1988) 「日本語の伝達表現」『日本語学vol.7』明治書院、の論文がある。

¹² 大島資生 (1991) 「連体修飾構造に現れる「という」の機能について」『東京都立大学人文学部人文学報225』参照

¹³ ここで指す「任意の〈という〉」とは、本稿で考察の対象とする「省略可能な〈という〉」と同一の要素を持つものと考えられる。

ていた。(abcともに坪本の例文)

上記の例文について、aは「継起的な時の用法」、bは「条件の用法」、cは「発話行為のモダリティの用法」とするのが一般的説明であるが、認知論的には、aはふたつの出来事が生じたままを描写しているもので、話し手の思考や判断などは介入しない、bではふたつの文が話し手の心的世界の中で論理的に関係づけられ(前提と帰結の関係)、cは論理的関係づけというより話し手の発話の観点や態度を述べたものであると考えられる。このような認知論的観点からすると、aの用法は外的世界のことがらを時系列に沿って述べたもので、これが認知領域の基礎となり、その先にbcのように話し手の主体性が関係し内的世界を叙述するそれ以外の領域がある。そうした時系列からの背景化がスキーマとして〈地〉(Ground)と〈図〉(Figure)という認知的関係を形成するのであるが、その背景化にはいくつかの段階がある。

背景化とは〈地〉(Ground)と〈図〉(Figure)との認知論的關係において〈地〉(Ground)に当たるものである。背景化は、前文(句)と後文(句)との連結に対する「主体的関わり方」を反映していて、背景化されるほど、話し手の「主体的な働き」が色濃くなり、「意味論的接続」から「語用論的接続」としての性質を強く持つことになる。

つまり、〈[P1]ト[P2]〉という文構造における「ト」は、第一に[P1]、[P2]のふたつの事象を生起した順序(=時間的前後関係)で連結するという中核的性質を持っており、その事象(事のなりゆき)を言語の必然的な制約である「線状性」という制約を受けながら言葉に表すときには、「話し手の視点」という概念が考慮され、そこには人間の認知作用が働き、話し手の認識を反映するという語用論的側面が関係してくる。換言す

れば、時の用法としての〈ト〉と条件の用法としての〈ト〉とは、共に時系列からの「背景化」の異なる現れ方であって、[P1]の事態の背景化の度合いが高くなるほど「発話行為のモダリティ」(発話行為の領域)が強くあらわれるようになる。

以上が坪本(1993)の主張である。

3.3.1.2 蓮沼(1993): 物語の世界

蓮沼(1993)は、条件形「たら」と「と」の用法についての考察のなかで、語りものに現れる「と」の用法について、以下のように例文をあげて説明し、さらにはその語り手の立場についても言及している。

僕はソファにもう一度寝ころんでラジオのトップ・フォーティーを聴きながら10分ばかりぼんやりと天井を眺め、そしてシャワーに入り熱い湯で丁寧^とに髭を剃ると、クリーニングから戻ったばかりのシャツとバミューダ・ショーツを着た。(村上春樹「風の歌を聴け」)

島村は顔を窓に寄せると、夕景色見たさ^とという風な旅愁顔を俄づくりして、掌でガラスをこすった。(川端康成「雪国」)(下線は原文のまま)

蓮沼は、このような「と」の用法を、「同一人物の連続的な行為を表すものであり、小説の地の文や物語といった「語りもの」のジャンルで多用される文体的特徴である。「語りもの」は、語り手が時間の流れの中で次々と展開する出来事を叙述し、物語世界を構成してゆくものであって、その場合、筋の展開は語り手にとっては、あらかじめ予定された既知の情報であるが、その読者・聞き手の立場から見れば新情報だと言える。読者や聞き手は時間の流れのなかで、物語の新たな

展開に次々と接していくわけである。」とし、さらに、このような「語りもの」の語り手は「物語世界の内部からは独立した視点に立って」て、これは「演劇で、舞台の上で演じている俳優の視点ではなく、演技を天井桟敷から見下ろしている演出家、あるいは脚本家の有する視点と言えよう。つまり、語り手は、物語世界を外部からの観察者として語るものなのである。」と述べている。

4. 落語に見られる「という」の談話機能論的分析

4.1 「という」がつくる場面の二重構造

国廣(1982)は、「私は上着を脱ぐト、ハンガーに掛けた(国廣1982:268)」中の「ト」のような時間を表す「と」について、意義素論の観点から分析している。その構造は「私は[[上着を脱ぐ]ト[上着をハンガーに掛ける]]た」となり、そこでは、「ト」は[上着を脱ぐ]、[上着をハンガーに掛ける]という時制辞を含まない命題を同じ資格(傍点は原文のまま)のものとして結び付けており、その全体に時制辞の「タ」が結び付けられることで、表面上は「脱ぐト」でも意味的には「掛けた」と同じ時制を表わすことができる。一方、「私は上着を脱ぐト、ハンガーに掛けた」という言い方がどこかおかしいのは、「上着を脱ぐ」が肯定形で「ハンガーに

掛けた」が否定形であるからで、これは同じ資格の動詞句を結ぶ「ト」の機能と矛盾するためである。この機能は「ト」が名詞を結び付ける場合とまったく同じであり、起源を等しくするものであって、この名詞結合の場合の「ト」の意義素を「同じ資格の共同者を示す」ものと分析している。

坪本(1993)は、国廣(1982)の分析を踏まえて、「〈P1(命題)〉ト〈P2〉」という文構造において、「ト」が連結するP1とP2の間には、同じ資格があるとし、この「同じ資格」とは、(1)場面の同一性、(2)時間の長さの同一性を含む概念であると述べている。坪本は、場面の同一性について、「a. 神父館に引き揚げるト、お茶の用意ができていた。b. 神父館に引き揚げたトキ、お茶の用意ができていた。(abともに国廣の例文を坪本が引用したもの)」という2文の違いを、「aは、お茶の用意は「神父館」にしてあった場合に限り、bは場面が異なっても構わない。」と説明している。

ここで、3.3.1で概観した先行研究や上記の論説を参考にしながら、落語に見られる「という」の構造を分析すると、下図のような2つの「と」による場面の二重構造(場面①②)が見えてくる。

この二重構造の考え方は、砂川(1988)の「引用文における場の二重性」の概念を参考

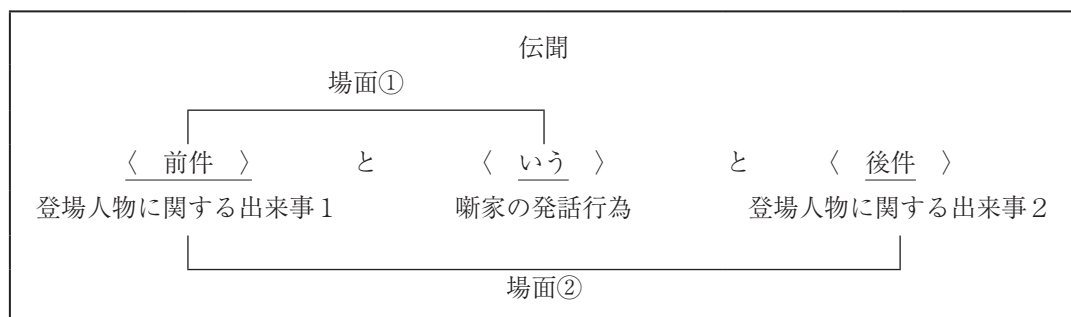


図1 「という」がつくる場面の二重構造

にした。砂川(1988)の概念とは、「太郎の〈旅行に行こう〉という発言を聞いた花子が、後にその出来事を記述しようとして、我々に〈太郎は旅行に行こうと言った〉と発したとする。ここには、花子の発言が成立した時空間的場面と、さらにそれとは別に太郎の発言が成立した時空間的場面という2つの場面が存在する。」というものである。

上記の図1全体には「伝聞のモダリティ¹⁴」が働いているが、これに関しては、落語は口承の語り芸であるという事実から異論はなからう。

次に、場面の二重構造という視点から考える。図1中の「場面①」の「〈前件〉と〈いう〉」の構造に注目すると、〈前件(噺家が語る)登場人物に関する出来事1〉に対して、噺家の発話行為である「いう(言う)」が受ける構造になっている。ここに関連する同じ資格として、同一の場面性を考える。つまり〈前件(の出来事)〉と噺家の発話行為である〈いう(言う)〉を同一の場面で連結させることにより、つまり〈前件(登場人物に関する出来事1)〉を噺家の発話時と同一の場面内の出来事のように伝えることにより、聞き手に前件の出来事と発話時が同時点で生起しているような錯覚を起こさせ、前件の出来事に臨場

感が生まれる仕組みとなる。ここでいう臨場感とは、あたかも発話時点で、高座上で、舞台上で、目の前で起きているような(演じられているような)感覚をさす。これを、場面①とする。

場面②に移ろう。次に、噺家は、「〈前件〉と〈いう〉と〈後件〉」という構造で談話を展開する。ここにおける同じ資格とは、〈前件〉〈後件〉ともに登場人物に関する出来事であり、それを時系列に沿った現象叙述文として話すのであるが、ここに見られる噺家(=発話者)のモダリティは客観的¹⁵である。

4.2 「という」とがつくる笑いの構造

さらに、ここで分析の対象とした「と」の二重構造には、笑いの生まれる構造としてベルグソン¹⁶や落語家の桂枝雀¹⁷等が提言している「緊張と緩和」が存在する。ベルグソン(2012)は著書『笑い』において、笑いの起こる法則を考察しているが、そこでは、びっくり箱を例にあげ、この玩具の仕組み、つまり箱から飛び出す子鬼をぎゅうぎゅう圧えなければ、子鬼はそれだけぴょんと高く跳ね上がるという単純な仕組みが、いつの時代にあっても我々の笑いを誘うのだと説く。そして、我々はそれを何度も繰返し可笑しがるのであるが、そこに存在する笑いの法則は「緊張しては弛緩しさらにまた緊張するばねの形象」にあると述べている。野村(2002)は「枝雀のオチの分類の基本には、二つの要素がある。一つは、オチをキキテがなぜおもしろいと感じるのかという理由を「緊張と緩和」と

¹⁴ 本稿での「モダリティ」の定義は、益岡(1993)に準拠する。益岡は「日本語の文が基本的に、客観的に把握される事柄を表す要素と、表現者の主観的な判断・表現態度を表す要素の二大要素で構成される、という構造観は今日では多数の日本語研究者が受け入れている有力な見方」であると述べる。二大要素の前者がいわゆる「命題」であり、後者が「モダリティ」といわれるものである。益岡は「モダリティ」を「判断し、表現する主体に直接関わる事柄を表す形式」と規定している。この「判断し表現する主体」とは、本稿においては噺家のことであり、ここでの「伝聞のモダリティ」とは聞き手に対する噺家の文伝達の態度を示す働きをいう。

¹⁵ 益岡隆志(1993)『日本語の条件表現』において、「「ト」形式は現実に観察される継起的な事態の表現」と述べている。p17 くらしお出版

¹⁶ ベルグソン(2012)『笑い』第81刷。岩波文庫(pp69-71)

¹⁷ 桂枝雀(1993)『らくごDE枝雀』ちくま文庫

かんがえることである。もう一つは、落語が本質的に「嘘話」だと見ることである。」と述べている。ここでいう「もう一つの理由」についてもう少し説明すると、枝雀は落語のオチの談話構造の基本は「ホンマの領域」と「ウソの領域」の対立であると述べているが、このことから、聞き手はいかにも本当の出来事のように語られる噺に緊張し、最後のオチによってそれがウソだと気づくことで緩和を体験する、つまり聞き手の認知は「ホンマの領域」から「ウソの領域」へと瞬時に落ちることとなり、その過程にはベルグソンの指摘する笑いの法則が存在すると筆者は解釈するものである。

以上のような観点から先の図1を見ると、上述の枝雀の論述はオチに関するものであるが、枝雀のいう「ホンマの領域」と「ウソの領域」、言い換えるならば、聞き手の認知を「噺家の発話時」と「噺の中の出来事時」との間で瞬時に移動させるという談話構造には笑いの法則が適用されていることに気づく。そして、場面①の臨場感を持った発話が聞き手の緊張を生み出し、場面②の客観性を持った発話が聞き手の緩和を生み出すという笑いの生まれる二重構造が見えてくるのである。

4.3 「というと」がつくる前景化・背景化の二重構造

ここでは、坪本(1993)メイナード(1999)などの先行研究を参考にして、「というと」の構造を認知論的に分析する。

まず、認知言語学における前景化・背景化とはどのようなものかについて、山梨(2000)『認知言語学原理』より該当部分を以下に引用する。

一般に、図と地(ないしは、前景化・背景化)の区分は、次のような言語表現

の認知的側面のちがいに関係している。:(i)新情報を構成する部分は図、旧情報を構成する部分は地、(ii)断定されている部分は図、前提とされている部分は地、(iii)ある存在の位置づけにかかわる場所ないし空間は地、そこに位置づけられる存在は図、(iv)移動する存在を表現する部分は図、その背景になる部分は地、(v)省略されている部分は地、記号化されている部分は図。(山梨2000:78)

山梨(2000)の区分に関して日本語をみた場合、例えば(i)(iii)では、格助詞「が」と係助詞「は」の例をあげることができる。日本語文法において、「が」は新情報を表し、「は」は旧情報を表すという概念、また、「は」は提題(topic)の機能を持つという概念も今や定説となっている。このことを認知論的に考えると、「が」により陳述された新情報を目立つ存在として前景化させ、「は」により陳述された旧情報はその文脈全体におよび背景化するといえる。

メイナード(1999)はこの提題の「は」に関して、物語のテキストを分析しており、物語では「誰を中心に、誰の視点から、どう物語を語るか」ということが重大な意味をもつと述べている。メイナードによれば、「物語の登場人物との関連で「は」はそれを主題化し、「が」は非主題化する機能がある。主題化を選ぶか非主題化を選ぶかは、つまり「は」を選ぶか「が」を選ぶかは、物語の創作者・語り手がどのような効果をその文章にもたらしたいかによる。仮に、物語の場面(ステージ)をイメージした場合、「は」により主題化された人物や出来事はステージ上でコンスタントにスポット・ライトを浴び続け、一方「が」により非主題化された人物や出来事はインス

タントにスポット・ライトに照らされる。「は」と「が」の選択は、単に新情報、旧情報の差によって成されるのではなく、語り手によるステージング操作によって成される。ステージングが伝える重要な意味は、その操作をする仕手としての言語主体の存在と、その言語主体の価値観やものの見方である。最終的には、物語の作者はステージング操作を通して語る自分を表現しており、読者は知らず知らずのうちに、語り手のステージング操作に沿った形で物語の意味を理解していく」という。

さて、本稿の考察対象である「〈前件〉というと〈後件〉」構造について考えたい。「〈前件〉と〈後件〉」の構造には、まず前件が新情報として前景化され、次いで後件が陳述されるときには前件は背景化するという認知の

仕組みが存在する。この仕組みを「〈前件〉と〈いう〉」の構造に当てはめると、〈前件〉は前景化された後に〈いう〉が発話された時にはすでに背景化している（背景化①）。その後続く「〈いう〉と〈後件〉」の構造において、〈いう〉が瞬間的に前景化された後、「〈前件〉と〈いう〉」全体で背景化される（背景化②）。つまり、この構造は背景化の階層性を持っており、「〈前件〉 + と + 〈いう〉：噺家の発話行為」 + と 〈後件〉」構造全体で、前件・後件の内容を聞き手に提供するだけでなく、噺家の発話行為（＝話し手の存在）そのものをも聞き手の認知領域に潜在化させる機能を持っている。このことは先述のメイナード（1999）のステージング操作の概念と共通するものとする。（図2参照）

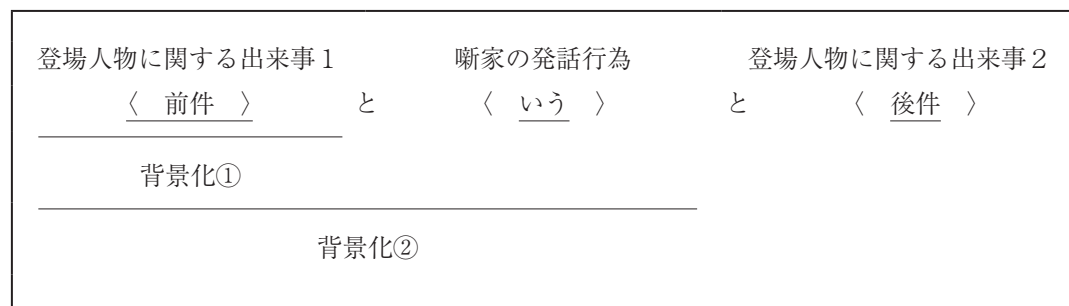


図2 「という」とがつくる背景化の二重構造

5. まとめ

メイナード（1994）は「『という』表現のメタ言語的な特殊性とそれに支えられる対話性を観察することは広義の引用表現を理解するうえでヒントになり、最終的には言語を使用する主体と、その使用される言語を意識する主体とのかかわり方を考察する上でも役に立つであろう。」と述べている。本稿において、落語の音声資料に頻出する「というと」を取り上げ分析することにより、それら研究の一端として、現実に存在する日本語の引用表現

における談話機能の象徴的な側面が観察できた。

また、今回の考察で、噺家の語りに関する2つの手法も観察できた。それは、一つに緊張と緩和を作り出し、もう一方で聞き手との共感形成の場を作るという機能を持っている。

尾上（1999）は、落語の談話構造には落語家と聞き手の共感形成が必要であるとした上で、「落語の演者はあくまでも語り手でなければならぬ。笑われる対象や笑うべき話の登

場人物としてではなく、笑うべき素材を聞き手に紹介する語り手として、聞き手と一緒にそれを笑うその場の一員としてそこに存在するのでなければならない。」と述べている。

蓮沼(1993)は「語りもの」の語り手は、物語世界に対して「全知のもの」といった立場を占め、「語りもの」は他者に帰属する情報を、伝聞やモダリティ形式の付加によって間接化することが、そもそも要請されないという特性を備えた談話のジャンルである。」と述べている。この中で、蓮沼は「語りもの」を「小説の地の文や物語」と定義している。筆者はそれらを「語りもの」の中の「読みもの」と分類する。噺家の発話による「落語」は「読みもの」ではないので、上記の蓮沼の考察対象からは外れる。よって、筆者は小説や物語などの「読みもの」については蓮沼に同意するが、落語に関しては、これまでの考察から、「語りもの」を表現する接続助詞「と」の前に、[引用の格助詞「と」+発話動詞「いう」]を付加することで、伝聞や発話者の既知情報の有無を含意するモダリティを付加することができる。さらに言えば、「というと」を使用する発話者(噺家)は、発話者自身が既知情報を持っていない(既知情報の無)という態度をとることもできる。その場合、噺家は、聞き手とともに物語の展開を見ていくという立場をとる。つまり、噺家は、話し手・聞き手双方の共感形成の場を提供しながら話を進めていくという語り的手法(=談話機能)を駆使しているということがわかる。

6. 今後の課題

今回の考察で、先人が論述されてきた落語の「語り」の談話機能が実際の発話に顕在している一例として「というと」を提示し確認できたことは、それら研究の一端を如何程かおし進められたのではないかと自負してい

る。今後も落語音声資料を中心に日本語の談話現象の観察を続けたい。

参考文献

- 井上和子(1983)「日本語の伝聞表現とその談話機能」『言語12巻11号』大修館書店
- 尾上圭介(1999)「落語の〈下げ〉の談話論的構造」『日本語学vol.18』明治書院
- 国廣哲彌(1982)「第5章 意味分析の方法」『意味論の方法』大修館書店
- 砂川有里子(1988)「引用文における場の二重性について」『日本語学vol.7』明治書院
- (2006)「「言う」を用いた複合辞」藤田保幸編『複合辞研究の現在』和泉書院
- 泉子・K・メイナード(1994)「「という」表現の機能」『言語23巻11月号』大修館書店
- (1999)『談話分析の可能性—理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版
- 坪本篤朗(1993)「条件と時の連続性—一時系列と背景化の諸相」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版
- 野村雅昭(2002)「第三章 オチの構造」『落語の言語学』平凡社
- 蓮沼昭子(1993)「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」益岡隆志編『日本語の条件表現』くろしお出版
- バルグソン(2012)『笑い』第81刷。岩波文庫
- 益岡隆志(1993)「第2章モダリティの構造」『モダリティの文法』くろしお出版
- 山梨正明(2000)『認知言語学原理』くろしお出版
- 参考とした辞典**
- グループ・ジャマシィ編(2007)『日本語文型辞典』くろしお出版
- 友松悦子他(2010)『日本語表現文型辞典』アルク
- 日本国語大辞典第二版編集委員会編(2003)『日本国語大辞典』小学館

参考資料 [表1 江戸落語音声資料一覧] (総時間9時間23分25秒)

	落語術	落語家	真打昇進年	所要時間 (分:秒)	「と」と「て え」との出現数	収録年	音声資料名
1	うどんや	三代目柳家小さん	1891	4:26	1	不明	CD「落語蔵出しシリーズ9」COCF-14828
2	一人酒盛	六代目三遊亭圓生	1920	22:29	3	1973.1.24	CD「六代目三遊亭圓生」PCCG00766
3	らくだ	五代目古今亭志ん生	1921	27:45	6	1958.2.2	CD「五代目古今亭志ん生名演大全集3」PCCG-00695
4	一人酒盛	五代目柳家小さん	1939	38:00	1	不明	DVD「五代目柳家小さん落語名演集」COBA4515
5	中沢家の人々	三代目三遊亭円歌	1958	18:35	4	1996.10.6	CD「NHKCD新落語名人選 三代目三遊亭円歌」UICZ4135
6	寝床	古今亭志ん朝	1962	37:10	34	1977.10.5	CD「志ん朝復活 色は匂へと散りぬるを」SICL14
7	愛宕山	古今亭志ん朝	1962	39:55	16	1978.4.6	CD「落語名人会3古今亭志ん朝3」SRCL2783
8	茶釜	古今亭志ん朝	1962	33:02	37	1980.6.16	CD「志ん朝復活 色は匂へと散りぬるを」SICL17
9	宿屋の富	古今亭志ん朝	1962	30:32	31	1980.10.13	CD「落語名人会3古今亭志ん朝3」SRCL2783
10	崇徳院	古今亭志ん朝	1962	35:14	25	1982.1.18	CD「落語名人会27古今亭志ん朝19」SRCL3363
11	駐車場物語	十代柳家小三治	1969	40:00	11	1992.10.31	CD「精選落語柳家小三治」DYCW1254
12	玉子かけ御飯	十代柳家小三治	1969	20:54	16	1992.10.31	CD「精選落語柳家小三治」DYCW1254
13	時そば	十代柳家小三治	1969	24:05	20	1994.1.31	CD「精選落語柳家小三治」DYCW1251
14	明烏	三遊亭楽太郎 (現6代圓 楽)	1981	32:26	4	2009.10.9	CD「三遊亭楽太郎十八番集」TECR-21347
15	まんじゅうこわい	三遊亭歌る多	1993	17:12	4	不明	DVD「古典落語お稽古つけ」EXPD-3284
16	目黒のさんま	柳家花緑	1994	15:40	1	不明	DVD「落語がいはいそその二」RAKU-DY02
17	出来心	立川志らく	1995	26:15	5	1997.10.24	CD「志らくのピン」COCA-14805
18	明烏	立川談春	1997	38:50	4	2005.9.20	CD「立川談春 来年3月15日」YBCR-1003-4
19	時そば	桂平治 (現11代文治)	1999	12:10	7	不明	DVD「落語をもっとたのしもう下巻」PCBE-51650
20	寿限無	林家たい平	2000	6:35	1	不明	DVD「落語をもっとたのしもう上巻」PCBE-51649
21	船徳	林家たい平	2000	42:10	1	不明	DVD「たい平落語」COBA-6313

参考資料 [表2 江戸落語の音声資料に見られる「というと・てえと」の出現状況] の一部

題名	落語家名	出現場所	セリフ	分析	構造	補足
1 うどんや	3代柳家小さん	会話	おれが祝い物をやった。「是非来てくれ」ってえと、「さあ、どうぞこちらへ」ってって、上座へ座らせられちゃったんだ。	発話の引用	というと	
2 一人酒盛	三遊亭圓生	会話	「悪い酒しかねえ」ってえと、「こんなんひどい酒はねえ」とか「こんなものは飲めたもんじゃねえ」とか、何か文句いいながら。	発話の引用	というと	
3 一人酒盛	三遊亭圓生	会話	B29 ってえのが来やがってアブアブってね。あいつが来るってえともう、ほんとにぞつとしたよ。	条件 恒常	Vる(という)と	
4 一人酒盛	三遊亭圓生	会話	「すこし高いねえ」なんてえと、「ああ、高えと思つたら、うちの魚、食つてもらいたいからねえや」なあって。	発話の引用「なんという」と	というと	(なん) という
5 らくだ	古今亭志ん生	地	アグと申しますと、ただいまは結構なもんでありますが、昔はってえと、あのアグにはずいぶんこの自分で行ろんなことをしたために、えー、そのアグにあたるなんてことを申しますな。	対比「はという」と	はというと	
6 らくだ	古今亭志ん生	地	えー、どうもいろいろありますが、どうしてもああいうものはってえと、うーん、なあに構わねえってんで食う人があるんでな。	主題「はという」と	はというと	
7 らくだ	古今亭志ん生	地	どうも以前はってえと、この長屋というのがあってね、この長屋にはきつと嫌なやつがいたもんでござりますな。	対比「はという」と	はというと	
8 らくだ	古今亭志ん生	地	本名をうまざんというて、人はあだ名してラクダといいました。どうしてラクダってえと、なりが犬さくでノソソしてからラクダっていうあだ名がついてんで。	内容説明 疑問句 + 「という」と	かというと	疑問終助詞「か」の脱落
9 らくだ	古今亭志ん生	会話	集めるの集めねえのつたら、今度は他が出ていくからな。俺が行くってえと、ものがめんどくさくなるってそういういな。	条件 仮定	Vる(という)と	
10 らくだ	古今亭志ん生	会話	まー、「だめだ」ってえと、めんどくさいですよ。ええ、じゃあ、俺が出てくってつってましたよ。	発話の引用	というと	
11 一人酒盛	5代柳家小さん	会話	おまえさんはどうも酒飲むてえとね、だらしがないからね、仕事ほつたらからかしまうから。	条件 恒常	Vる(という)と	
12 中沢家	三遊亭円歌	地	67 ってえとね、一昨年、うちへね、年金でえのがきたんですよ。	連想	Nというと	
13 中沢家	三遊亭円歌	地	久遠寺というところに行行にまいりまして、なんとって、700何年経ってるとてえと、ジネン道場へポオんと放り込まれて。	発話の引用	というと	
14 中沢家	三遊亭円歌	地	一番先の兆候はってえと、頭から汗が出ます。	主題「はという」と	はというと	
15 中沢家	三遊亭円歌	地	目開けるってえと、うちのおおばあさん、一番真ん前、地獄へ来たかなって思つてね。	時間的前後関係	Vる(という)と	
16 寝床	古今亭志ん朝	地	近頃、スナックですとか、えー、あるいは、バー、クラブなんてえところへ出かけるてえと、大概の店に何かリズムボックスなんてえのが	時間的前後関係	Vる(という)と	
17 寝床	古今亭志ん朝	地	しつこい人になるってえと、一旦、マイクを握るてえと、なかなか離さない人がいますな。	条件 恒常	Vる(という)と	
18 寝床	古今亭志ん朝	地	しつこい人になるってえと、一旦、マイクを握るてえと、なかなか離さない人がいますな。	条件 恒常	Vる(という)と	
19 寝床	古今亭志ん朝	地	隣のテーブルの人だったり何かするてえと、やはり、手前どものほうも芸人ですから、えー、そこは世辞というものが必要だと思つてから	条件 仮定	Vる(という)と	
20 寝床	古今亭志ん朝	地	しばらくやっっているってえと、これまた不思議なもんで、大変に気持ちのよくなつてくるもんです。	条件 恒常	Vる(という)と	
21 寝床	古今亭志ん朝	地	なんかこう稽古するってえと、それを人に聞かせたくなくという、そういう気持ちからは分らないでもないです。	条件 恒常	Vる(という)と	
22 寝床	古今亭志ん朝	地	ふーつと後を振り返つてみるってえと、だあれもないんで、本人一人でダレてたりなんかしてますが。	時間的前後関係 視線の移動	Vる(という)と	